

の商品サイズ(600g)までの養成期間は約2年である。

尚、本県で使用されている餌料は、雑魚(ミズン、トウゴロウイワシ、トビウオ等)、ウナギ及びコイ配合飼料等である。それらの混合割合、投餌方法は業者により異なり、季節的にも変動がある。

次年度は、餌料及び養成歩留りを加味した成長試験を行なう予定である。

### Ⅲ 甲長と体重の関係

スツポンの甲長と体重の関係を、養殖及び天然産スツポンの測定データによつて、第2図に示した。図では、約500~700gをさかいにして上部が天然産、下方が養殖スツポンのデータであるが、両者の差はほとんどなく同一曲線上に並ぶ。図には示されていないが一般的に雌は雄に比べて同長でも重い傾向が見られる。特に300~500g以上でその傾向が強い。これは雌が成熟して、卵巣が発達し体高が高くなり、また、体幅が広くなることによると考えられる。

### Ⅳ 疾病について

養殖池に発生する病亀を取り上げ、外部及び解剖観察を行なった。

主な疾病は、症状によつて仮称名により分類すると、(1)水生菌寄生(年中多発)、原生虫類寄生、フタカブリ病等の寄生性疾病。(2)咬傷、スレ等。(2)栄養障害に起因すると思われる変性脂肪蓄積。(3)内臓障害、穴開き、失眠、オタフク病などが見られる。特に夏期にそれらの混合疾病が多発し、斃死に致り歩留りを低くしている。また、親及び種苗の導入直後の斃死が多く、被害量も大きい。いずれも原因、対策及び被害の度合については明確でない。

疾病の実態、池の環境、病亀の外部及び病理学的調査、疾病対策について継続研究中である。

### Ⅴ 放養密度について(試験中)

放養密度については、梶(1969)、余(1971)、大分内水漁試(1971)等によつて、それぞれ示されているが、数値は一致していない。例えば10g以下の当才稚亀の適当な放養量について見ると、 $m^2$ 当り6~7.3頭で大きな開きがある。大分内水漁試によつて当才稚亀には、最適放養密度があつて、 $m^2$ 当り7.3頭より多くても少なくとも、増肉係数、増重量及び斃死率の成績が低下することが明らかにされ、他の報告よりも高密度飼育である。2才~4才亀については $m^2$ 当り30~1頭であるが、業者によつてはその数倍の放養量で良い成績を納めている所もある。

本県でも、放養量は業者によつて異なり、最適放養密度は明確でない。養殖において放養密度は、養殖経営をも左右する重大な要因である。最適放養密度を明らかにするため、現在放養密度試験を下記方法により実施中である。